「安産」・旅の安全「橋守」・「極楽浄土」会津若松市大戸町大豆田

大豆田のおんば様・橋姫神社

大戸町上三寄大豆田（まめた）の橋姫神社

国道一一八号線の阿賀川（大川）と闇川（くらがわ）とが合流する北側の一角に京都府宇治を本社とする橋を守る橋姫神社があります。

建物には石像と木造の二体の座像があります。石像は、上下二つに割れ、高さ約六十センチで平面形をし、目が吊り上がり、口が横に大きく裂け、左膝が立ち、そこに左手が添えられ、右手には力綱のようなものを持ち、老婆の仰々しい姿をしています。木像は、石像よりやや小さく、胸が木材の乾燥から縦に半分に裂け目が入っています。右膝が立てられ、そこに右手が添えてあり、左足は曲げられ、左手に力綱を持って座っています。像の背には「闇川橋掛替石切安置示時　享保十二年（一七二八）丁未年八月吉日」と墨で書かれ橋の掛け替えで祀られたものです。

『大戸村郷土史』には、聖徳太子が百済人の路子麿に命じ、諸国に二百八十の橋を架け、その一つがこの闇川橋で、この橋姫神社祀つり、祭日は三月十五日であったという。『会津四家合考』には、天正十七年（一五八八）六月五日に猪苗代町の摺上原で、葦名義広が伊達政宗と戦い敗戦し、六月九日に黒川城（現若松城）から脱出する時、葦名氏配下の星備中が闇川橋を落し、常陸に逃げるのを助けたとあります。星備中は大戸町香塩の香塩館に住んでいました。

さらに『会津鑑』には寛永十六年（一六三九）四月十六日、堀主水が藩主の加藤明成と意見の相違による衝突によって出奔、門田町一ノ堰で、若松城に向って鉄砲を放ち、闇川橋に火を付け、焼き落したとあります。その時の言い伝えが『大戸村郷土史』に「橋に火が付けられ、その明かりによって堀主水が、舟子峠の難所を越えた丑の刻（午前二時）橋の向かいに住んでいた橋守「（芳賀）勘之丞」は、橋が燃えているとも知らずに熟睡していたため、石像のおんば様が「勘之丞橋が燃ゆるぞー」と大声を張り上げ、喉が裂けるほど叫んだので、ようやく目を覚ましたが、橋はすでに灰となってしまった。おんば様は、あまりに大声を出したために、石像の体が二つにさけてしまったという。」

また、闇川上流にある修験道として知られていた闇川大戸岳の一ノ鳥居があった所とも言われています。

橋姫神社は、橋や川で人を襲った悪い橋姫大神を祀りその神の怒りを沈めるために橋守として安置したものです。橋姫大神の姿が老婆の奪衣婆に似ていることから、山岳信仰と結びつき、修行の場の入口に神聖な区域と俗世界とを区切る結界として、極楽浄土へ行く三途の川に見立てたため奪衣婆を安置したのです。昭和初期までお産のスタイルだった座産の姿が同じ安産として信仰されていた如意輪観音像に酷似していたことから、いつの頃か橋守と合せ、安産としても信仰されるようになったのです。令和元年（二〇一九）十月、大豆田地区や有志によって社殿が新らしくなりました。